

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月20日現在

機関番号：12608

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720185

研究課題名（和文） モニタリングを促すための他者への説明活動を取り入れた読解学習プログラムの開発

研究課題名（英文） Constructing reading comprehension using the explanation activities for Japanese as a second language class

研究代表者

佐藤 礼子（SATO REIKO）

東京工業大学・留学生センター・客員准教授

研究者番号：30432298

研究成果の概要（和文）：本研究では，上級と中級レベルの日本語学習者を対象に，読解におけるモニタリングの働きを促すため，「他者への説明」を取り入れた読解学習を実践した。文章内容に関する質問作成活動、及び、他の学習者と話し合いながら文章内容を資料としてまとめ、それを発表する「説明活動」を行った。実践の結果，学習者間の説明活動のみでは学習者によって理解度の向上の度合いが異なったが，説明活動に文章構造を意識化するフィードバックを組み合わせることで，より多くの学習者において文章理解度が向上することが示された。

研究成果の概要（英文）： As an activity to enhance the reading comprehension for Japanese learners, the effects of explanation through making and presenting a resume in a poster with partner(s) were investigated. The results from the explanation activity showed an improvement on reading comprehension, but the effect was different among the learners. Furthermore, the explanation activity with feedbacks about the text structure and its re-making showed more improvement in comprehension. For enhancing reading comprehension, it is necessary to have an explanation activity combining with explicit feedback.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：読解，教授法，協働学習，自己モニタリング

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年，日本語教育の分野では教授学習研究の重要性が論じられるようになってきている。中でも，読解に関わる研究者や教育現場を中心に，学習者どうしが互いに働きかけあいながら協力して学ぶ協働学習という学習方法が注目され，関心が高まっている（館岡，2005）。

読解力向上を目的とした教育実践研究として有名なのが，第一言語の読解不振児を対象とした Palincsar & Brown (1984) の「相互教授法 (reciprocal teaching)」である。「相互教授法」では，読解方略の獲得を目的として，教師役の学生を中心に，4 つの方略（「要約」「質問作成」「明確化」「予測」）をグループの中で用いながら読みを進める。これら相互教授の手法を参考にし，大学で学ぶ留学生に適した学習活動と考えたのが，本研究課題の「他者への説明」を取り入れた読解学習である。

(2) しかし，これまでの教授学習研究では，力点が教授効果の検証に置かれ，授業での学習プロセスが具体的に考慮されることが少なかったこともあり，教育現場での実際の使用にはつながりにくいのが現状である。教育現場に適用可能な教授方略を見出すためには，特定の教材・スキルの特殊性を考慮したうえで，教授学習プロセスの解明と教授方略の開発が進められるべきである（高垣他，2006）。

(3) 本研究課題は，協働的学習を取り入れた日本語読解学習プログラムを提案してゆくことを目的とする教授学習研究である。具体的な教授学習法として「他者への説明」を読解活動に取り入れた実践授業を実施し，「学習活動が自己モニタリングに与える影響」（認知的側面の解明）と，「特定の教材・スキルを対象とした教授方略の開発」（教育的意義の達成）の両面から研究を進めることとした。

2. 研究の目的

本研究は，日本語学習者を対象とした読解において，自らの理解をモニタリングする働きを促すことで文章理解を促進する読解学習方法を検討することを目的としている。理解のモニタリングとは目的に応じて自分の理解の状態を評価し，それに基づいて読みをコントロールすることであり，文章理解をはじめとする読解における目的の遂行に関与する。

本研究では，モニタリングを促すための活動として，文章の内容を他者にたずねる，もしくは他者に説明する活動を提案し，これを取り入れた読解指導法を検討する。具体的には，以下の3点を明らかにすることを目的とする。

(1) 「文章を説明する活動」が文章理解に及ぼす影響を検討する。

(2) 学習者の認知的特徴の一つとして理解

度の自己評価を取り上げ、読解活動との関係について考察する（認知的側面の検討）。

（3）読解授業において、教師による文章理解支援方法を検討する（教育的意義の達成）。

3．研究の方法

文章を説明する活動として、「文章内容に関する質問作成活動」及び「他者に説明する活動」を実施し、文章理解への影響と実践方法について検討した。

（1）学習者が文章内容に関する質問と答えを作る活動を用いた実践授業

質問作成活動は、日本語学習者の文章理解への効果が既に認められており、また個人内の文章理解のみならず他者への働きかけを念頭に置いた理解が求められる課題である。

授業実践では、教示が質問の質を左右すると予測されることから、教示を工夫した。また、学習者が作成した質問についてフィードバックを行う機会も設けた。参加者は日本語上級学習者で、説明文を材料とした。

学習者が作成した質問と、質問へのフィードバック過程を分析対象とした。

（2）文章の内容を他者に説明する活動を核とした実践授業

日本語の読解を学び始める時期である、中級前半の学習者を対象とした読解活動として、説明活動に説明資料作成を組み合わせることとした。具体的には、読んだ文章の内容を紹介する説明資料（小ポスター）を複数の学習者が協働で作成する活動を読解授業において実践した。本活動では、グループでの説明資料の作成過程及びクラスでの発表の 2

段階で、読んだ内容を他の学習者に説明する必要がある。参加者は日本語中級学習者で説明文を材料とした。

文章理解への影響については、説明活動前後の文章理解度の自己評価、活動前後の文章理解度テスト（正誤判断問題）、説明プロセスの分析、学習者が作成した説明資料、により検討した。これらにより、「学習活動がモニタリングに与える影響」（認知的側面の解明）と、「特定の教材・スキルを対象とした教授方略の開発」（教育的意義の達成）の両面から考察する。

4．研究成果

（1）学習者が文章内容に関する質問を作る活動については、実践授業において、次の 3 つの教示を試みた。質問に加えて答えも作成すること、質の異なる質問を作成させること（理解を問うもの、問題意識を問うもの）、明確な目的を与えること（文章の要点理解や文章構造の理解を促すことを目的とする場合、重要な部分を選ぶよう指示）。また、学習者が作成した質問についてフィードバックを行う機会も設けた。

学習者が作成した質問を分析した結果、質問作成は文章構造の把握や問題意識の明確化につながる活動であることが確認できた。

（2）フィードバックの有無が異なる 2 つの説明活動を実施し、文章理解度の変化や作成した説明資料の内容を比較した。

実践 1（説明活動のみ）:

読解後に学習者ペアで読んだ文章のトピックを説明する説明資料（小ポスター）を作成し、クラスで発表する。

実践 2（説明活動＋フィードバック＋再度

説明活動):

読解後に学習者ペアで説明資料を作成して発表した後、内容のまとめ方(文章構造)に関するフィードバックをクラスで行い、再度説明資料を作成する

実践1の結果:説明活動が文章理解に及ぼす影響を検討したところ、理解への効果は学習者によって異なり、理解度が向上する学習者がある一方、理解度が下がる学習者もいた。これは、説明活動によって誤った理解が修正されたり深まったりする学習者がいる一方、他者の説明を聞くことによって、誤った理解をしたり、混乱したりした学生がいたと考えられる。

理解度の自己評価と文章理解との関係を検討したところ、読解直後に自らの文章理解度を比較的 low に評価していた学習者は、説明活動の後、理解度テストの成績が向上する傾向がみられた。一方、読解直後に文章を完全に理解していると評価した学習者は、その後の説明活動を経ても、理解度テスト成績の向上は見られず、誤った理解が修正されない傾向がみられた。

実践2の結果:実践2では、発表後に、よりよい説明について話し合い、その中で文章内容の構造を意識化するフィードバックを行い、その後学習者間で説明資料の再構成を行った。この結果、より多くの学習者で文章理解の向上が示唆された。

理解度の自己評価と文章理解との関係を検討したところ、実践1と同様、文章を完全に理解していると評価していた学習者には活動の効果が見られなかった。

(3)以上により、適切な読みの視点を与えることと、再度の活動を行うことによって、

より多くの学習者の理解が促進される可能性が示された。

他者に説明することによる理解度への効果は、文章の要点理解や既有知識との関係付けなどの文章理解の精緻化にあると予想している。このような読みは、専門科目の学習や文献購読と発表において必要となる読解技能でもある。

今後の課題は、自らの理解度を実態よりも高く評価する学習者では活動の効果が見られにくく、このような学習者に対してどのようにすれば理解の修正を促すことができるかを検討することである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

佐藤礼子,日本語の中級読解授業における説明活動を用いた理解の構造化の試み,日本語教育方法研究会誌,査読無し, Vol. 38, No. 1, pp. 74-75, 2012.

佐藤礼子,日本語学習者の協同的読解活動としての問題作りにおける発話事例の分析,留学生教育,査読有り, Vol. 15, pp. 55-64, 2010.

佐藤礼子,文章の構成と重要な部分を意識化するための読解活動の検討,日本語教育方法研究会誌,査読無し, Vol. 17, No. 1, pp. 88-89, 2010.

[学会発表](計3件)

佐藤礼子,日本語の中級読解授業における説明活動を用いた理解の構造化の試み,第38回日本語教育方法研究会,2012

年3月10日,国際基督教大学.

Reiko Sato, The roles of explanation and collaborative learning on comprehension monitoring, 16th World Congress of Applied Linguistics, 2011/08/24, Beijing foreign studies university, Beijing, China.

佐藤礼子,文章の構成と重要な部分を意識化するための読解活動の検討,第34回日本語教育方法研究会,2010年3月27日,東京農工大学.

〔図書〕(計1件)

佐藤礼子,日本語教育における自己調整学習,自己調整学習:理論と実践の新たな展開へ,北大路書房,pp. 225-239, 2012.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 礼子 (SATO REIKO)

東京工業大学・留学生センター・客員准教授

研究者番号: 30432298